

# 反戦会議

通信

No.72  
6.9.4.8

東京教育大学  
反戦会議

へ三・七中教審の実体化ローラウマウトを崩碎し学園を奪還せよ！

教育大学の全ての学生諸君！

三・一田奪還斗争を戦闘的に斗い抜いて反戦会議より四・一田奪還斗争へ向けこの我々の紅白ヒーラものを明らかにして行きたい。我々はまずオート現年の秋ド隊によるローラウマウト中の大学が三・七中教審の実体化であり移転後の大学の姿であることを再度確認しなければならぬ。政府フルジヨアジーの七十周年にして大学政策ラレリ大学政策をもち得す七〇年若安対策としてレガ「大学問題」をつちだすことができないのだ。それは東大・日大を頂点とする大学斗争總体への权力の基運にじみた彈圧にみられる通りである。三・七中教審はそれより日家权力の彈圧を後からライデオロギー化するものであり、大学政策として緻密化されたものではなく、まさに七十周年との場しのぎにしてあるのだが我々は学園を真に奪還し再封鎖をかうじることによって政府フルジヨアジーの七十周年へ向けての意図そのものを粉碎していかなければならぬ。

へ田・二田学園奪還斗争をもこそ田・六沖縄奪還斗争の大爆發を準備せよ！

四・一田奪還斗争による教育大斗争の更なる躍進をはかるため、まず全日学園斗争の中に教育大斗争の質的立場をみて行きたい。現在斗われてゐる全日学園斗争は東大・日大斗争の切り崩した地平にのり、第二次学園斗争として斗われてゐる。戦後世界体制の危機アメリカ帝国主義の危機と規定され、安保同盟をその唯一の延命策とする日本帝日本の危機は個別改良斗争にすら譲歩せざるところを容観的条件として、

東大・日大斗争は最初は改良的課題をかなげつつも長期化ドロ沼化していった。

その斗いは帝の危機の中で、非大学的なものとしがちとなしえない大学そのものの存否をめぐらす中から、帝の主と大学粉碎のスローガンを高々とかかげ、大学の帝の主の的秩序そのものの破壊をめざす斗いへと上昇していった。その課程で大学の共同体幻想・大学精神は粉々に打ち碎かれ、それをウエールとしていた政府フルジヨアジーの大学支配「大協路線」も破壊していった。大学は正に「斗いの砦」となり、七十周年斗争への結合の明確な展望が生まれた。それは帝の主と日家权力との直接対決を回避し、七十周年安定期としての「大学問題」を生みだしたものである。

しかし教育大斗争自身は東大・日大斗争に支えられた斗争でしかなくかろうじて第二次学園斗争の後についてきた「すがな」。それは全日学園斗争の質と全く無自覚であり全日学園斗争全体の中に自己を位置づけ得かいからである。全日学園斗争を個別学園斗争の算術的総和としかどうえきれないため、学内主との克服を叫びつつ遂に学内主に對抗していわく「悪循環をくり返して」いるのだ。「筑波の外延化」「六九年教育斗争」とかを叫ぶことにより第二次学園斗争とよって切り崩された七十周年斗争との結びの展望を全く無視し始めて七十周年斗争と分離させているのだ。客観的に、第二次学園斗争にくみこまれてゐる教育大斗争は意識的には第一次学園斗争の質などさへこないのである。我々は第二次学園斗争の切り用いを有利な地平をはつきりとつかみとり、教育大斗争自身の明確に全社会的政治斗争——ヒの年安保斗争の中に位置づけなければならない。しかし学園にバリケード封鎖の延長線上に安保斗争があるのでなければ、教育大斗争を安保斗争として斗い抜くことバリケードストとヒラ軍事を育成する前提とレフ・ツベル斗争のとの中心環たる沖縄斗争を教育大斗争が保証していいことである。

我々はバリケードをくむことにより意識にかかる  
必ず審観場には日帝の支配の不安定性を拡大し、そ  
の支配の一員をつき締めていふことになり、安保同  
盟の矛盾範囲に対するヨリとしてこの七〇年安保斗争  
の一翼を任つていろいろことになるのだが、逆に主体の  
側から安保斗争との結びをどうえ返すならば正に安  
保斗争の最中心環たる沖縄斗争を媒介として有料的  
な結合をはかつていかねばならない。そのようにして  
大学斗争と安保斗争との運動論的結合をはかり教  
育大斗争と安保粉碎、日帝打倒の誓としようがゆうか  
教育大斗争に課せられた任ムは四二ハを前にして  
全国の大学で目的意識的に政治ストライキとして実  
現されよラとレーリーには第三次学園斗争として  
斗われんとしている質を自らのものとして採取して  
いくことざなければならぬ。四月学園奪還斗争は  
このような展望のもとで沖縄奪還斗争の大爆發を準備  
するものとして斗わねばならぬ。四二ハ沖縄奪  
還斗争の大爆發を教育大斗争が断乎として準備して  
いくヨリをヨリとろうではなむいか。